

大勢が山内の意見に傾きかけた時、休憩となった。

この休憩時、控え室にある西郷は、
会議に出席している岩倉に対して脇差の柄を叩きながら、
次のように言い放った。

「もし要求を呑まぬというのであれば、これ一本で解決しても良いのです」

言うことを聞かなければ容堂を斬ってしまえ、
ということである。
容堂はその事実を後藤象二郎から伝え聞かされる。

「……そこまで腹を括っているのか……」

さすがの容堂も沈黙せざるを得ない。

勝ち負けで言えば、容堂の負けである。

彼は、休憩前の論陣により自藩の徳川家への義理は果たした、
と自身を納得させざるを得なかった。

このあたりの西郷には、ぞっとするような凄みを感じさせる。

小御所会議が終わると辞官納地の徳川慶喜は、
形式上ただの浪人にされてしまう。

しかし、まだ足りない。

**徳川の世が完全に終わったのだと
世に知らしめるためには、
どうしても一戦しなくてはならない。**

日本が生まれ変わるには、

**日本の半分程が焦土となるような戦が必要なのだ、
というのが西郷の持論であった。**

じっとしている幕府側をどう挑発し、戦端を開くか。